

電話コミュニティー

—— その実態とコミュニケーションの重層性について ——

中 村 功

1. はじめに

1. 研究目的

電話、パソコン通信、インターネットなど通信メディアを通して成立するコミュニティーが議論されるようになって久しい。そのもっとも初期の議論は電話上の人間関係についてであった。電話は物理的距離を超越した親密なコミュニケーションを可能にするメディアであり、わが国においては1960年代後半から一般の家庭に普及しはじめた。家庭への普及に伴いおしゃべりの電話も一般化した。電話はそれまでになかった新たなコミュニケーション回路を開き、電話コミュニティーとも言うべき、電話上の親密な人間関係を生んだ。そしてこうした現象は多くの研究者たちの注目するところとなった。

たとえばアメリカの社会学者アロンソンは「サイコロジカル・ネイバーフッド (心理的近隣)」という用語を使い、電話で維持されるコミュニティーについて次のように述べている。

電話の普及とともに、人々の社会関係のネットワークは住居による物理的範囲 (オリジナルな意味の近隣) には制限されなくなった。すなわち、人々は人間的魅力や共有された関心に基づいて、住んでいる地域を越えた親密な社会ネットワークを発達させることができる。拡散した社会ネットワークについては、多くの都市住民が大都市圏に拡散して住んでいる人々と第一次集団を形成していることが、よく言われる。そうした集団は対面

の会合と同様に電話を通じても相互作用している。こうした第一次集団は、人々の「サイコロジカル・ネイバーフッド」(psychological neighborhood)を形成している。もちろん、近代交通が寄り集まることを可能にしているが、電話による結合なしに、それが長い間続くかはおおいに疑問である。(Aronson, 1971)

彼がここで提出した「サイコロジカル・ネイバーフッド」とは、一言で言えば「電話を通じて相互作用する、地域を越えた親密なネットワーク」のことである。例としては、健康を確認しあって毎日電話する1人住まいの高齢未亡人のネットワークが挙げられている。

こうした、電話が新たな人間関係を生んでいるという指摘は Gumpert (1987), Meyrowitz (1985), 藤竹(1980), 吉見(1992), 渡辺(1989), 吉井(1993) など多くの社会学者によってなされてきた。しかしその性質・構造・機能などは明確ではなく、その実態もこれまでほとんど解明されてこなかった。そこで本論では2回にわたるアンケート調査を行い、人々が持つ電話ネットワークの特徴や構造、とくに対面関係を含めた他メディアとの重層性について、明らかにしていく。

2. 概念整理

電話上の人間関係を表す議論や概念は様々あるが、分析を始める前に本論で使う概念について整理しておきたい。今回分析する電話上の人間関係のなかで最も広い概念は「私的電話ネットワーク」である。これは日常的に私的な通話をやりとりする人間関係を指す。本論では単に「電話上の人間関係」と言う場合もある。これを①日常的に会うか会わないか、②おしゃべり電話をする(あるいは電話上親密な関係にある)か用件電話のみの関係か、といった2つの軸で整理すると、図1のようになる。私的電話ネットワークには次の4種類の関係が含まれている。すなわち、日常的に会い、かつおしゃべり電話をする関係(I)は吉井(1993)のいうところの「心理的家族」である。一方、日常的には

図1 私的電話ネットワーク（電話上の人間関係）

	日常的に会う	日常的に会わない	→電話コミュ →ニティー
おしゃべり電話 をする（親密）	I 心理的家族	II サイコロジカル・ ネイバーフッド	
用件電話のみ	III 対面中心の コミュニティー	IV 家事の相手	

会わないがおしゃべり電話をする関係（II）には Aronson の言うところのサイコロジカル・ネイバーフッドがほぼ該当している。以上の I と II の関係性には日常的に会う場合と会わない場合があるが、いずれも電話上の親密な関係が存在している。ここではそうした電話上の親密な関係性を「電話コミュニティー」とする。また、日常的に会うが用件電話のみの関係（III）は、「対面中心のコミュニティー」といえるだろう。そして最後に、日常的に会わず用件電話のみの関係（IV）は電話による注文先や親しくない姻戚などの「家事の相手」が該当している。

なお本論で断りなく「電話」という場合は「固定電話」を意味している。

3. 調査について

第一の調査は20歳から69歳までの松山市民1,000人を対象に1997年に行われた（97松山調査）¹⁾抽出方法は選挙人名簿をもとにした2段階確率比例抽出で、調査方法は訪問配布、訪問回収による自記式留置法である。有効回収数は656票で回収率は65.6%であった。この調査において、図2のような質問文を用いて私的電話ネットワークを調べた。

そして第二の調査は15歳から59歳までの東京30キロ圏在住者1,520人を対象に1999年に行われた²⁾抽出方法は住民基本台帳から、性、年齢、による層化を行い、町丁別の人口規模により確率比例2段階抽出を行った。調査方法は訪問配布、訪問回収による自記式留置法である。有効回収数は1,000票で回収率は65.8%であった。この調査では、第一の調査とほぼ同様の方法で電話ネット

図2 97年松山調査で用いた質問文

仕事以外で、日頃あなたが電話をかけたり、あなたにかけてきたりする相手はだれですか。何人でも結構ですから、各人について①名前またはあだ名（これは作業上あなた自身が相手を区別するためのものなので回答し終わったら消していただいて結構です）②その人との間柄③その人との親密さ④その人と日常的に会うかどうか⑤その人の住居が(089)の市内電話区域内にあるかどうか、などを記入してください。（あてはまるものにそれぞれ1つずつ○をつけてください）

名前かあだ名 (回答後消去可)	その相手との間柄は	その相手とは 親密だ	相手とは日常 的に会う	相手の住居は (089)の圏内だ
1.	1.家族 2.友人 3.親族 4.その他	1親密 2イエ	1会う 2イエ	1市内 2イエ
(中略)	(中略)	(中略)	(中略)	(中略)
15.				

図3 99年東京圏調査で用いた質問文

仕事以外で、日頃あなたが電話や電子メールをやりとりする相手はだれですか。何人でも結構ですから、各人について①名前またはあだ名（これは作業上あなた自身が相手を区別するためのものなので回答し終わったら消していただいて結構です）②その人との間柄③その人とふつうの（一般加入電話）で話すか④その人とあなたの携帯電話（携帯・PHS）で話すか⑤その人と電子メールのやりとりをするか⑥その人と日常的に会うか⑦相手とはとても親密か⑧相手の住まいは、普段使う交通機関で、ご自宅から1時間以内で行ける距離にあるか、などを記入してください。（あてはまるものにそれぞれ1つずつ○をつけてください）

名前かあだ名 (回答後消去可)	その相手との間 柄は 1.家族 2.友人 3.親族 4.恋人 5.その他	その相手 と普通の 電話で話 す 1.はい	その相手 と移動電 話で話す 1.はい	相手と電 子メール をやりと りする 1.はい	その相手 と日常的 に会う 1.はい	その相手 とは親密 だ 1.はい	相手の住 居までは 1時間以 内だ 1.はい
1.	1. 2. 3. 4. 5.	1.	1.	1.	1.	1.	1.
中略	中略	中略	中略	中略	中略	中略	中略
12.	1. 2. 3. 4. 5.	1.	1.	1.	1.	1.	1.

平均4.1人

80.5

51.5

15.2

ワークの実態をたずねた上に、携帯電話、電子メール、ファックスなど各種通信メディアネットワークについても調査した（図3）。

II. 97 年松山調査の結果

1. 私的電話ネットワークの実態

(1) 全体的特徴

仕事以外で日頃電話する相手は一人あたり平均で5.1人だった。ただしこの欄に何も記入していない人が76人いた。これらの中には相手が0人の人もいるだろうが、すべて欠損値として処理した。その結果、3人の人が15.5%と最も多かったが、1人から5人までそれぞれ10%以上おり、5人までで全体の64%をしめた。15人までしか記入する欄を設けなかったが、15人まで全部記入した人は記入者の4.3%だった。

表1 私的電話ネットワークの規模

(97松山調査)

人数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
%	13.1	13.3	15.5	12.1	10.0	8.8	4.8	5.0	4.7	4.3	1.6	1.4	0.9	0.3	4.3

N=580

記入のあった580人について、合計2,960人の私的に電話をする相手(私的電話ネットワーク)の情報が収集された。すなわち、本人との間柄、親密さ、日常的対面度、相手との距離等の情報である。(ただし未記入データがあり、項目によって情報総数にはばらつきがある)そこでこれらの通話相手はどのような人なのか、まず全体的特徴を見てみよう。

間柄は家族が15.0%、友人が54.2%、親族が23.1%、その他が7.8%と、友人が半分以上をしめ最も多かった。しかし家族と親族親族をたすとやはり半数近くになり、これまでの調査の聞き方(例えば「どのような相手と電話することが多いですか」など)より多いようである。ここで家族だが、ここには、別居の家族も入っている。一般にどの範囲までが家族かは実は曖昧である。単身赴任

や進学で一時的に家庭を離れている場合だけでなく、すでに独立して別居している親子の一部などもここに含まれると考えられる。

表2 私的電話ネットワークの実態（全通話相手に対する％）

①間柄				②親密度	③対面接触	④相手の住居
家族	友人	親族	その他	親密	日常的にする	市内
15.0	54.2	23.1	7.8	82.3	51.3	68.8

n = : ① 2954 ② 2848 ③ 2868 ④ 2894 (97 松山調査)

次に私的電話ネットワーク間の親密度だが、親密だと考えられている相手は全体の 82.5%であった。日常的に仕事以外で電話する間柄なので大部分が親しい人であることはもっともなことである。

しかし相手と日常的に対面接触するかとなると、48.7%と約半数は日常的に会ったりしない人であった。ここから、親しいが日常的には会わない「サイコロジカル・ネイバーフッド」のような関係が、かなり一般的である可能性が示唆される。

(2) 属性別特徴

次に相手との距離だが、約7割（68.8%）の相手は089の市内通話圏内に住んでいた。普段電話をやりとりする相手の人数は、性別、学歴、職業、収入と関連がみられた。相手人数が多いのは女性の主婦やパートで、世帯収入は多い

表3 属性別私的電話ネットワークの人数 (97松山調査)

性別 ***		年齢 ns.					結婚 ns.		
男	女	20代	30代	40代	50代	60代	既婚 未婚		
4.1	5.9	5.0	5.5	4.7	5.0	5.5	5.1 5.0		
学歴 **				引っ越し回数 ns.			居住年数 ns.		
中卒	高卒	短大卒	大卒	0-1	2-4	5-	-6	7-18	19-
3.9	5.1	5.9	5.0	4.7	5.2	5.3	5.0	5.3	5.0
職業 ***					収入 *				
常勤	パート	主婦	学生	無職	-200	-400	-600	-800	-1000 1000-
4.4	6.2	6.8	4.3	4.7	4.4	5.2	4.7	5.6	4.7 6.2

χ^2 : *** $p < 0.001$ * $p < 0.05$ ns. $p > 0.05$

人のほうが若干多い。逆に少ないのは中卒の人である。電話ネットワークが豊かなのは主婦や女性層だが、意外と若年の学生などは少な目である。

表4 属性別通話相手との間柄 (%)

(97松山調査)

	家族	友人	親族	その他		家族	友人	親族	その他
性別 男	17.6	49.1	21.8	11.5	居住 -6	15.8	56.1	21.1	7.0
** 女	13.6	56.8	23.8	5.9	ns. 7-18	15.2	51.8	24.9	8.1
年齢 20代	11.0	73.7	6.7	8.7	19-	13.6	54.8	23.4	8.2
** 30代	15.1	56.3	19.6	9.0	職業 常勤	17.3	54.1	18.8	9.8
40代	16.6	51.9	25.3	6.2	** パート	12.8	57.4	25.8	4.0
50代	17.4	44.8	30.9	6.9	主婦	11.9	51.9	30.2	6.1
60代	14.1	41.2	36.2	8.5	学生	12.8	79.5	0.0	7.7
結婚 既婚	16.6	48.3	27.6	7.5	無職	15.4	47.1	28.1	9.5
** 未婚	10.0	71.2	10.1	8.8	収入 -200	9.6	63.3	21.5	5.7
学歴 中卒	18.1	37.8	37.8	6.4	* -400	14.2	52.9	23.4	9.5
** 高卒	15.0	53.7	24.0	7.3	-600	17.6	53.2	22.9	6.3
短大	10.5	59.0	23.2	7.4	-800	14.8	53.4	24.4	7.3
大卒	18.0	55.1	17.3	9.7	-1000	16.8	48.6	26.4	8.2
引越 -1	9.6	63.7	17.5	9.2	1000-	14.6	52.1	20.6	12.7
** 2-4	15.5	54.7	22.4	7.4	χ^2 : ** $P < 0.01$ * $P < 0.05$ ns. $P > 0.05$				
5-	17.8	46.9	27.9	7.4					

表5 属性別親密な人の割合 (%)

(97松山調査)

性別 ns.	年齢 *					結婚 *	
男 女	20代	30代	40代	50代	60代	既婚	未婚
83.0 81.8	84.5	79.3	84.6	80.6	82.0	81.3	85.0
学歴 **		引っ越し回数 ns.			居住年数 **		
中卒	高卒	短大卒	大卒	0-1	2-4	5-	-6 7-18 19-
75.7	81.0	80.7	88.0	83.3	80.9	82.6	85.2 79.3 82.4
職業 *				収入 *			
常勤	パート	主婦	学生	無職	-200	-400	-600 -800 -1000 1000-
81.7	84.5	80.6	100	84.9	78.1	80.6	80.6 83.5 83.3 87.5

 χ^2 : ** $P < 0.01$ * $P < 0.05$ ns. $P > 0.05$

間柄で特徴的なのは、若い人、未婚者、学生などで友人の比率が7割を越え、相手が友人に集中していることである。これらの層では逆に親族が少なくなっている。これは未婚の若年層の人間関係を象徴しているものと考えられる。

相手が親密な人である割合は、性別と引っ越し回数以外の各変数と関連があったが、とくに高学歴、高収入の人や学生などで高かった。学生が話す相手が親しい人が多いというのは、電話相手のほとんどが友人や恋人だからであろう。また、高学歴・高収入の人で親しい人が多いというのは、後述するように、彼らの電話ネットワークに構造的な特徴があるからと考えられる。

日常的に会う人の割合は年齢、学歴、引っ越し回数、収入と関係があった。日常的に会う人の割合が少ないのは、引っ越し回数の多い人、高学歴者、40歳代の人であった。これらのカテゴリーの人はあまり会わないのに電話で話をする人が多くいるという意味で、サイコロジカル・ネイバーフッドを持っている可能性が高い人たちである。

日常的に会うかどうかは、相手の居住場所にも関係している。相手との距離が遠ければ会いたくてもなかなか会えないからである。相手のうちで市内在住者が占める割合は学歴、引っ越し回数、居住年数、収入と関係していた。市内在住者の割合が少ない人は学歴が高い人、引っ越し回数が多い人、居住年数が少ない人、そして収入が多い人であった。

表6 日常的に会う人の割合

(97松山調査)

性別 ns.		年齢 **					結婚 ns.		
男	女	20代	30代	40代	50代	60代	既婚 未婚		
49.9	52.0	53.4	57.1	45.1	49.6	51.8	51.2 50.9		
学歴 **				引っ越し回数 **			居住年数 ns.		
中卒	高卒	短大卒	大卒	0-1	2-4	5-	-6	7-18	19-
52.9	54.6	49.5	46.0	60.0	51.3	44.5	49.7	50.2	54.4
職業 ns.				収入 ns.					
常勤	パート	主婦	学生	無職	-200	-400	-600	-800	-1000 1000-
50.4	50.8	51.6	48.7	56.8	52.8	54.5	49.3	51.0	49.8 48.7

 χ^2 : ** $P < 0.01$ ns. $P > 0.05$

表 7 市内在住者の割合

(97松山調査)

性別 ns.		年齢 ns.					結婚 ns.	
男	女	20代	30代	40代	50代	60代	既婚	未婚
68.6	68.9	69.6	73.0	66.9	67.1	66.4	68.4	69.9
学歴 **			引っ越し回数 ns.			居住年数 ns.		
中卒	高卒	短大卒	大卒	0-1	2-4	5-	-6	7-18 19-
71.1	71.7	69.5	62.0	76.9	68.8	63.1	64.6	68.5 74.0
職業 ***				収入 *				
常勤	パート	主婦	学生	無職	-200	-400	-600	-800 -1000 1000-
70.7	66.9	66.4	59.0	69.3	73.0	73.8	70.1	66.8 67.3 60.9

 χ^2 : *** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ ns. $p > 0.05$

引っ越し回数が多い人は、生まれ故郷から離れ肉親から遠ざかったり、引っ越しのたびにその地で知り合いを作ったりして、遠隔地に在住し日常的にはあまり会えないような相手を多く持っているのであろう。したがって日常的な電話相手にもそうした人たちが多くなるのは合点がいくことである。一方収入が高い人が遠隔地の相手が多いのは遠距離通話の料金が苦にならないということがまず考えられる。しかしそれと同時にそうした人の人的ネットワークが他の人より広いというとも考えられる。また学歴の高い人は転勤のあるような職業に就くことが多いために、引っ越しが多くなるのであろう。

2. 私的電話ネットワークのタイポロジー

アメリカのディミックら (Dimmick, J., Patterson, S. and Sikand, J., 1996) は私的電話ネットワークの実体を知るために、どのような人がどのような電話ネットワークを持っているかを検討した。彼らによると、ある人の持つ私的電話ネットワークはその成員間の親密性と距離によって4タイプに分類できるといふ。すなわち、親密な相手と近距離の相手の割合がともに高いAタイプ、親密な相手の割合は低いが近距離の相手の割合が高いBタイプ、親密な相手は多いが近距離の相手の割合が低いCタイプ、親密・近距離ともにその割合が低い

Dタイプの4つである。その上で、2回にわたる電話調査（コロンバス調査、オハイオ調査）で、私的な電話をする相手一人一人について、相手のイニシャル、間柄、親密度、相手との距離をたずね、他方回答者の属性など（移動性：5年間の引っ越し回数、教育：院卒-5～高卒1、収入：1～11）についてたずねた。その結果、Aタイプのネットワークを持つ人はCおよびDタイプを持つ人より居住年数が長く、A、Dタイプの人よりも教育水準が低かった。Cタイプの方はAやBタイプよりも長距離電話をよくかけていた。そしてDタイプの方はAタイプやBタイプの人よりも移動性型が高かった。これは次のようなことを意味する。すなわち、これはCタイプの人に典型的に見られるが、教育水準が高い人は高収入で、おそらく仕事のために引っ越しが多くなる。そういう人は結果として広い範囲に親しい人が存在しており、遠距離通話をかけることでそのネットワークを維持している。これは現代的なコミュニティーのスタイルである。その一方、Aタイプに代表されるのが伝統的なコミュニティー・スタイルである。低学歴低収入の人はあまり地理的移動がなく、比較的狭い範囲で親密なネットワークをもっている。そうした人は電話ネットワークも近距離が多くなるというわけである。この試みは電話ネットワークを実証的に明らかにしようとする試みとして評価できる。

表8 ネットワークタイプと社会属性 コロンバス調査 (Dimmick, 1996)

ネットワークタイプ	居住年数	移動性	教育	収入	遠距離通話数
A (親密/近い)	21.22	1.05	2.76	3.68	4.13
B (疎遠/近い)	16.44	1.01	2.91	3.87	3.04
C (親密/遠い)	12.44	1.27	3.51	4.47	7.77
D (疎遠/遠い)	11.31	1.63	3.72	4.20	6.37

97年松山調査ではこのディミック調査を参考にしながら、似たような内容を質問紙調査で聞いている。彼らと同様な方法で分析をした結果、所有する電話ネットワークタイプと最も関係が深いのは引っ越し回数（移動性）で、A、B

両タイプの人には引っ越し回数が少なく、D、C両タイプの人には引っ越しが多かった。またA、Cタイプの人には男性が多く、B、Dタイプをもつ人には女性が多かった。これはおそらく女性（特に主婦）が家庭では秘書的な役割をしているために、あまり親しくない電話相手が多くいるのであろう。またディミク調査と同様にAタイプの人とCタイプの人には対照的な性質を持っていた。すなわち、Aタイプの人には学歴や収入が低く、引っ越し回数も少ない。逆にCタイプは学歴が高く、収入が多く、引っ越し回数も多かった。その一方居住年数や、年齢、平均通話時間などは電話ネットワーク・タイプと有意な関係はみられなかった。

表9 ネットワークタイプと社会属性

(97松山調査)

タイプ／構成比	性別**	学歴*	職業*	引越回数+++	世帯収入+
A（親密/近い）29.4%	男	低め	フルタイム	3.3	544.2
B（疎遠/近い）16.9%	女		主婦	3.2	572.4
C（親密/遠い）30.4%	男	高い		4.6	634.0
D（疎遠/遠い）23.3%	女		主婦	4.5	566.4

χ^2 検定：* $P < .05$ ** $P < .01$ 分散分析：+ $P < .05$ +++ $P < .001$

そのほか特に興味深いのは、遠距離通話の相手の方が市内通話の相手より、親密な人の割合が高いということである。すなわち親密な人の割合は、ディミクのコロンバス調査では、遠距離で73.7%、市内で62.5%、オハイオ調査では遠距離で79.1%、市内は62.9%であった。また松山調査でも同様の傾向があり、親密な人の割合は市内通話圏の相手では80.0%なのに対し、それ以遠の相手では87.4%であった（カイ二乗検定の有意水準は1%）。一見遠くの相手とは縁遠くなると思われるので、この結果は若干の意外性を持っている。これは遠距離通話ではちょっとした用件の通話が減るので、あまり親しくない人との通話が相対的に減るためと考えられる。逆に言えば、遠距離通話ではしっかりした親しい関係性だけが生き残るのである。そこにはおそらく肉親や、引っ越しや長い

時間を経ても変わらない親友などが含まれるのであろう。なお、電話事業者の通話データによると、遠距離通話では一回あたりの通話時間が長くなっており（市内 258 秒，100 キロ以上 333 秒；N T T，1999），このことは遠距離で短い用件電話が少ないことを裏づけている。

3. サイコロジカル・ネイバーフッドの実態

すでに述べたように，日常的には会わずに主に電話によってつながりあう親しい人間関係をここではサイコロジカル・ネイバーフッドという。本来ならそこにおしゃべり電話をするという条件も加えるべきだが，97 松山調査では，日頃よく電話をする相手の中で，「日常的に合うことがなく」，「親しい」間柄をサイコロジカル・ネイバーフッドとした。そしてその構成メンバーをサイコロジカル・ネイバーとする。分析の結果，このサイコロジカル・ネイバーは，日頃電話する相手全体の 38.2%（N=2822）であった。

表10 サイコロジカル・ネイバーの間柄 $P < 0.01$

電話相手	家族	友人	親族	その他
親しい+日常会わない	15.5	50.1	32.2	2.2
それ以外	14.3	57.3	17.4	11.0

(97松山調査)

ではそうした電話相手はどのような人なのであろうか。間柄ではやはり友人が 50.1% を占め最も多いが，親族が 32.2% と非サイコロジカル・ネイバーと比べると多くなっている。またその他の相手は 2.2% とほとんどいない。

表11 サイコロジカル・ネイバーの住居 $P < 0.01$

	市内	市外
親しい+日常会わない	36.8	63.2
それ以外	88.4	11.6

(97松山調査)

サイコロジカル・ネイバーと相手との距離を見ると、市外にすむ人の割合が63.2%と、そうでない人の11.6%に比べ、劇的に多くなっている。距離が物理的接触を阻み、電話に依存した関係を作り上げている傾向が読みとれる。

次にどのような人がサイコロジカル・ネイバーフッドを持っているか、被調査者個人を中心にみてよう。一人あたり何人のサイコロジカル・ネイバー（親しいが日常会わない電話相手）を持っているかを調べたところ、0人が32.8%と最も多く、ついで1人(22.9%)、2人(15.9%)、3人(10.9%)、4人(5.9%)、5人(5.0%)と相手の人数が増えるにつれて構成数が減っている。そして6人以上は合計しても6.6%しかいなかった。このように、サイコロジカル・ネイバーフッドを持たない(0人)人が1/3と最も多く、居たとしてもせいぜい2、3人以内と、ごく少数の場合が多いようである。

表12 サイコロジカルネイバーの数

(97松山調査)

人数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
%	32.8	22.9	15.9	10.9	5.9	5.0	3.3	1.2	0.5	0.7	0.3	0.3	0.3

そこでサイコロジカル・ネイバーを1人でも持つ人と全く持っていない人に分け、どのような人が電話コミュニティーを持っているのかをみる。

表13 サイコロジカル・ネイバーの有無と性別・年齢・学歴 (97松山調査)

	性別**		年齢*					学歴**			
	男	女	20代	30代	40代	50代	60代	中卒	高卒	短大	大卒
なし	39.3	28.0	27.9	34.7	25.0	42.2	40.2	47.2	38.0	20.9	25.0
あり	60.3	72.0	72.1	65.3	75.0	57.8	59.8	52.8	62.0	79.1	75.0

 χ^2 : ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

性別では、電話コミュニティーを持つ人は男性が60.3%であるのに対し、女性は72.0%と、女性の方が多くなっている。女性は電話好きと言われるが、そのような女性の特徴がここに現れているのであろう。

年齢では50代・60代といった高い年齢層で若干少なかった。しかしサイコロジカル・ネイバーフッドを持つ人が若い人に限られているという傾向はなく、高齢層でも半数以上の人がサイコロジカル・ネイバーフッドを持っていた。

学歴は中卒、高卒の人でサイコロジカル・ネイバーフッドを持つ人が少なかった。学歴の低い人は社会移動が少ないため電話だけで話す機会が生まれにくいのか、それともそのような人は対面的コミュニケーションを好む傾向があるのか、その原因についてはよくわからない。

表14 サイコロジカル・ネイバーフッドの有無と職業

	フルタイム労働	パート・アルバイト	専業主婦	学生	無職
なし	36.9	22.3	21.0	33.3	42.6
あり	63.1	77.7	79.0	66.6	57.4

(97松山調査)

次に移動性とサイコロジカル・ネイバーフッドの関係をみる。引っ越し回数が1回以下の方は59.2%しかサイコロジカル・ネイバーを持たないのに比べ、2から4回の方は67.9%、5回以上は74.2%と、引っ越し回数が多くなるとサイコロジカル・ネイバーフッドの所有者が多くなってくる。また現在の場所に居住している年数を尋ねると6年以下の方が76.5%と高くなっている。このように、引っ越しを何度も繰り返し、居住年数が少ない、地理的移動性が高い人は、かつての居住地で培われた人間関係の重要度が高いために、それらとの交際を電話のおしゃべりによって実行していると考えられる。その一方で居住年数が7年以上と多くなると、居住地の人間関係が整備されてくるので、電話コミュニティーを持つ人が減ってくるのであろう。

表15 サイコロジカル・ネイバーフッドの有無と引っ越し回数・居住年数

	引っ越し回数*			居住年数 **		
	～1	2～4	5～	～6	7～18	19～
なし	40.8	32.1	25.8	23.5	35.4	39.7
あり	59.2	67.9	74.2	76.5	64.6	60.3

(97松山調査)

Ⅲ. '99 年東京圏調査の結果

99 年東京圏調査では 1,000 人の回答者から合計 3,890 人の通信相手についての情報が得られた。ここでは電話、移動電話(携帯電話・PHS)、電子メールなどについて私的な内容をやりとりする相手の、間柄、日常的対面接触の有無、親密度、相手住居との距離などをたずねた。電話については 3,003 人の相手について、移動電話(携帯電話・PHS)については 1,893 人、電子メールについては 497 人の相手が挙げられた。電話について言えば、間柄についてはほぼ松山調査と同様の傾向が見られたが、日常的に会う人、とても親密な人(ただし松山調査では「親密な人」)、近距離に住む人などの割合は前回よりも少ない目であった。同様な他の調査と比較しても少ないのは選択肢に「いいえ」を設定しなかったためかもしれない。そこで、この調査ではメディア間のネットワークの比較と重複具合を見ることに重点を絞ることにしたい。

各メディアネットワークを比較すると、間柄では、どのネットワークでも友人が最も多いが、電子メールは友人の割合が 8 割を越し極端に高い。友人の比率はついで移動電話、電話の順に低くなっている。次に日常的に対面接触をする相手の割合をみると、移動電話の相手が最も高く、ついで電話、電子メールの順に低くなる。対面接触と同様の傾向は近くに住む人の割合にもみられ、割合が高いのは移動電話、電話、電子メールの順になる。電子メールのネットワークは距離を超越する力が高いのに対して、移動電話のそれは弱いといえ、両者

表16 各通信メディアネットワークの特徴 全体 (東京圏調査)

	間柄					通信手段			会う	大変 親密	近い	N=
	家族	友人	親族	恋人	その他	電話	移動	メール				
全体	19.8	59.9	11.6	2.6	6.1	77.2	48.7	12.8	41.3	47.1	43.0	3,890
電話	20.5	57.8	14.4	2.3	5.1	100	—	—	41.9	50.5	44.8	3,003
移動	20.6	63.7	4.4	4.6	6.8	—	100	—	52.2	52.0	49.6	1,893
メール	3.8	82.9	0.8	3.4	9.1	—	—	100	38.4	48.7	36.6	497

は対照的である。一方、「とても親密な人」の割合はいずれのメディアでも5割前後で、メディア間でほとんど差はみられなかった。

ある相手と複数のメディアで連絡を取り合うことがあるために、これらのメディア・ネットワークはお互いに重なり合っている。もしその重なり具合が多ければ、単純にネットワークを比較してもはっきりした違いは出にくい。そこで、つぎに3つのメディアの相手の重なり具合を見てみる。図4は各メディア相手の重なり具合を示している。これによってわかるのは、第一に電話はユニバーサル・サービスとして大きな大きな位置を占めていることである。電話は単独で利用されることも多く、また他メディアとの重なりでも電話と当該メディアという組み合わせが多い。第二に移動電話（携帯電話・PHS）のネットワークの特異性である。電話、電子メールなどのメディアは他メディアと併用しない単独利用が最も多いが、携帯電話は単独利用より電話との併用ネットワークが多くなっている。ここから、移動電話が、とくに固定電話に対して、付随的なメディアであることがわかる。

図5は、利用メディアごとに「とても親密な人」がしめる割合を表したもの

図4 各ネットワークの重なり具合 (N=3,890) (東京圏調査)

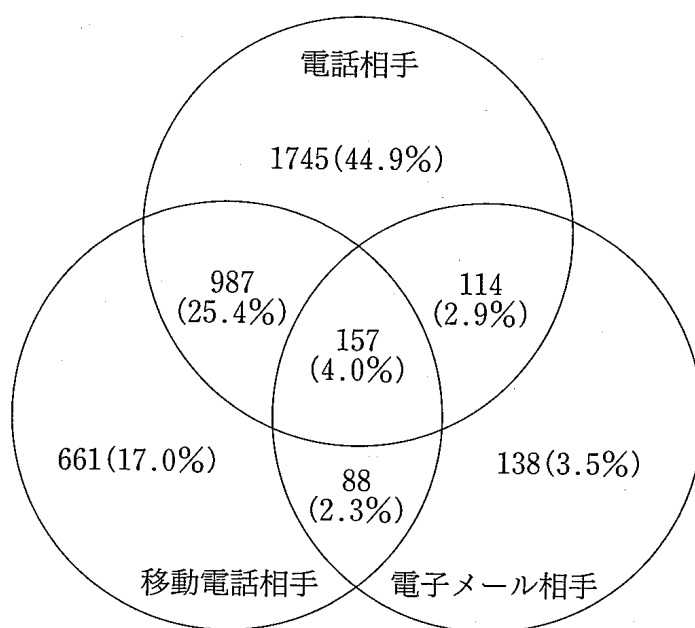
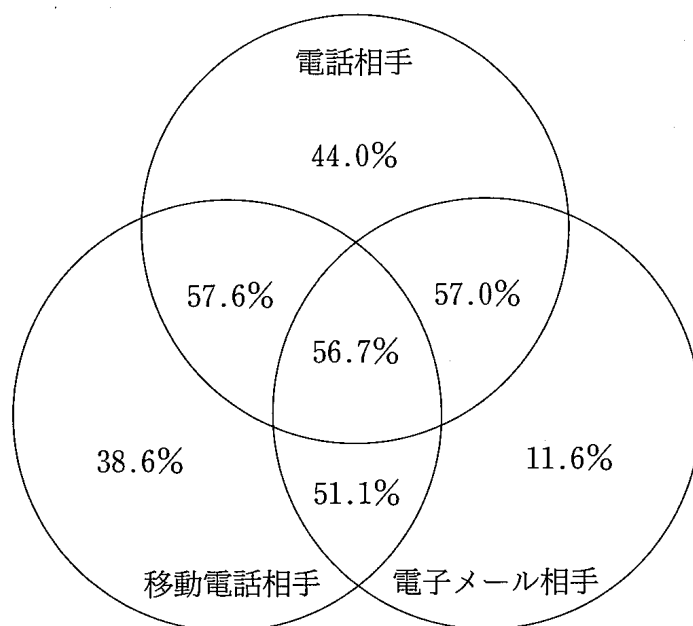


図5 とても親密な人の割合 (N=3,890) (東京圏調査)



である。ここで目につくのは、電子メールだけでやりとりする相手では「とても親密な人」が11.6%と著しく低いことである。逆に、電話と移動電話、あるいは電子メールと移動電話など、2種類以上のメディアを使って連絡を取る相手では、「とても親密な人」の割合がいずれも50%以上と、高くなっている。やはり、親しい人とは様々なメディアを利用して密接な連絡を取り合うのであろう。

図6は利用メディアごとに「日常的に会う」人の割合を示したものであるが、ここでの傾向も「親密な人」の場合と似ている。すなわち電子メールのみの相手では日常的に会う人が少なく、逆に複合的にメディアを利用する相手では日常的に会う人が多くなる。ただ電子メールと固定電話の組み合わせの場合、複合的利用だが、他の複合的利用ほどには日常的に会う人の割合が多くなかった。

さらに図7は、相手の住居まで1時間以内という、「近距離」に住む相手の割合を、メディアごとに表したものである。近距離に住む人の割合も「日常的に会う人」の割合と同様の傾向を示し、電子メールのみの相手は近距離に住む人が少なく、複合的にメディアを使う相手は近距離に住む人が多い。ただ電子メー

図6 日常的に会う相手の割合 (N=3,890) (東京圏調査)

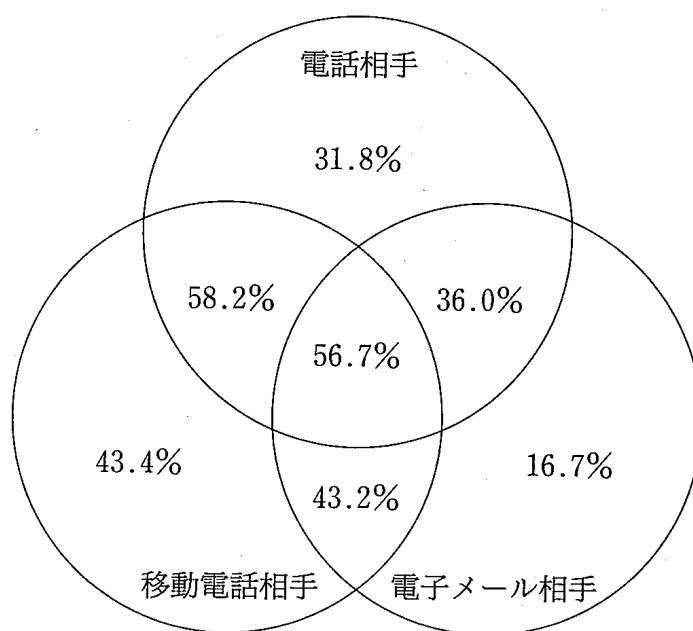
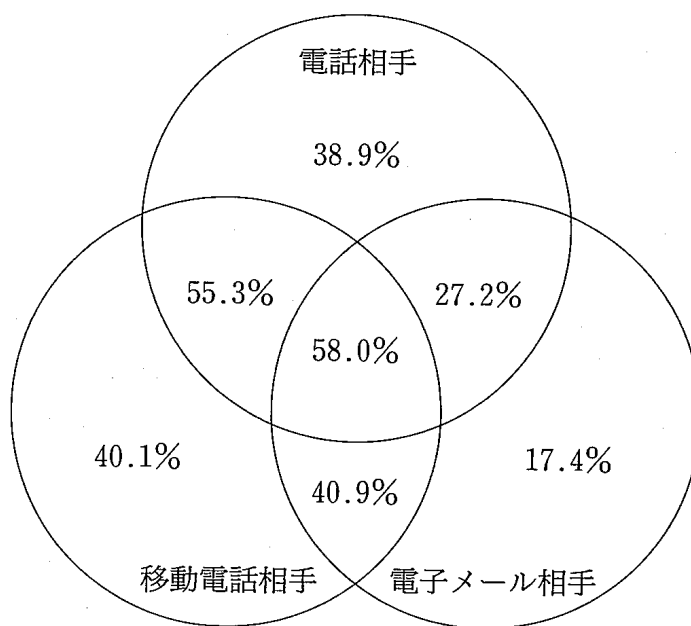


図7 近距離に住む相手の割合 (N=3,890) (東京圏調査)

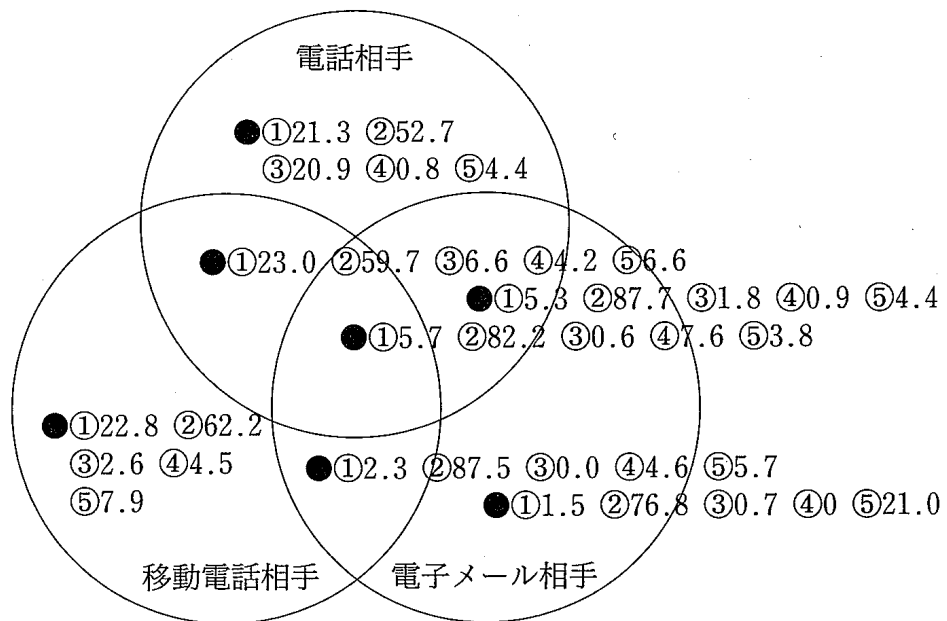


ルと電話の複合利用は、他の複合利用より近くに住む人が少ない。これは電子メールも固定電話もともに遠距離との通信に適したメディアであるためと考えられる。従って複合利用でも近くに住む人が少なく、それゆえに日常的に会う相手も少ないのであろう。

図8は利用メディアごとに通信相手の種類を示している。ここで特徴的なのは第一に、電子メールに関わる部分では家族・親族の割合がともに低く、友人が8割以上と極めて高くなっている。これは、同居の家族に電子メールを送るのは不自然であること、あるいは親族の場合、相手が利用者でない割合が高いことなどによるのであろう。そして第二に移動電話に関わる相手は家族は固定電話と同様に2割程度いるが、親族の割合が低い。これは親族の場合いつも会っているわけではないので近況報告など長電話になりがちなことや、待ち合わせの緊急連絡などの用件が少ないためであろう。そして第三に電話単独の相手では親族が2割と多くなっている。これは親族との連絡に使われることが少ない電子メールや移動電話がここでは除かれるためである。

次に、表17は今度は日常的な対面接触をも一つのメディアとして考えて、各

図8 相手の種類 (N=3,890) ①家族 ②友人 ③親族 ④恋人 ⑤その他



メディア利用の重層性と、各パターンの相手の特徴を集計したものである。表左側の黒丸は当該メディアの使用の有無を示し、その右の数字は当該パターンの人数を示している。そして表上方から1つだけのメディアを使う相手から2つ、3つ、4つと次第に多くのメディアを併用するパターンが並べられている。(なお該当者が0のパターンは除いてある)

表 17 対面接触を含めたメディア利用の重層性と相手の特徴 東京圏調査

重複	電話	移動	EML	対面	N	家族	友人	相手 親族	恋人	他	とても 親密	住居 近接
1		●			374	18.5	68.7	4.3	2.1	6.4	23.5	26.5
			●		115	1.7	75.7	0.9	0	21.7	8.7	16.5
	●				1190	19.2	49.9	26.6	0.4	4.0	33.1	24.4
2	●	●			413	14.3	61.5	11.1	1.9	11.1	42.1	34.4
	●		●		73	5.5	90.4	2.7	0	1.3	48.0	20.6
	●			●	555	26.0	58.6	8.7	1.6	5.2	67.2	69.9
		●	●		50	0	90.0	0	2.0	8.0	46.0	28.0
		●		●	287	28.6	53.7	0.4	7.7	9.8	58.2	57.8
			●	●	23	0	82.6	0	0	17.4	26.1	21.7
3	●	●	●		68	2.9	88.2	1.4	0	7.4	60.3	36.8
	●	●		●	574	29.3	58.4	3.3	5.8	3.3	68.6	70.4
	●		●	●	41	4.9	82.9	0	2.4	9.8	73.2	39.0
		●	●	●	38	5.3	84.2	0	7.9	2.6	57.9	57.9
4	●	●	●	●	89	7.9	77.5	0	13.4	1.1	84.3	74.2

これによると、全相手(3,890)の中で最も多いパターンは電話のみの相手で1,190人であった。ついで多いのは、「電話+移動電話+対面接触」を併用する相手が574人、「電話+対面接触」が555人、「電話+移動電話」が413人、移動電話のみが374人、「移動電話+対面接触」が287人などとなっていた。このように見ると、電話のみの相手が全体の1/3を占め、かなり多いものの、日常的対面接触も含めると、通信メディアというものは他メディアと重複して使われることが多いことがわかる。

第二に、電子メール利用の相手には親密な人が少ない傾向が若干あるものの、このメディアを使う相手は親密とか親密でない、といった各メディアと親密さ

の関連性はそれほど明確ではなかった。むしろ、利用されるメディアの重層性が高くなればなるほど、親密な相手が多くなるという傾向がよりはっきりと見られた。たとえば単独の利用では「とても親密」な相手の割合は、電話が33.1%、移動電話が23.5%、電子メールが8.7%といずれも低い。しかし「電話+移動電話」では42.1%、「電話+電子メール」は48.0%「電話+対面」は67.2%など、2メディア併用になると4~6割と高くなり、3メディア併用では5~7割、そして4メディア併用となると84.3%まで親密な人の割合が跳ね上がるのである。親密になるほど様々なメディアを駆使してコミュニケーションを図ろうとするのか、あるいは様々なメディアを通じて交流すると親密度が増すのか、その因果関係はここからは明らかではないが、電話コミュニティーというメディアを通じた親密な人間関係にとって、メディア利用の重層性がきわめて重要な要素であることが指摘できるだろう。

IV. ま と め

松山調査では電話コミュニティーの特徴がわかった。すなわち私的電話ネットワークのうち約8割が親密な相手で、約半分が日常的に会わない相手であった。親密で日常的に会わない電話相手をサイコロジカル・ネイバーとすると、私的電話相手の約4割がサイコロジカル・ネイバーであった。その特徴は遠距離に住む人で、そうした関係を持つ人は引っ越しの多い人や高学歴の人や女性にとくに多かった。

一方東京圏調査では他メディアとの重層性が明らかになった。電話は単独に利用されることが他メディアと比べて多いものの、対面接触も加えると、全電話相手(3,003人)のうち電話単独でつながる相手は1/3(1,190人)程度にすぎず、他メディアとの重複利用が重要なことがわかった。そして利用されるメディアの重層性が高くなればなるほど、親密な相手が多くなるという傾向が発見された。これは電話コミュニティーという電話を通じた親密な人間関係が電話だけのつながりによって成立しているのではなく、対面を含めた他メディアとの

重層性を前提に成立していることを示唆している。もし電話コミュニティーに対して、「電話だけを通じて作られるバーチャルなコミュニティー」というようなイメージがあるとすれば、上記のような事実は、そうしたイメージの修正を迫ることになるであろう。

注

- 1) 調査主体は著者を室長とする松山大学社会調査室で、調査は授業の一環として行われた。調査詳細は、松山大学社会調査室(1998)『1997年松山市民情報行動の実態』を参照。
- 2) 調査主体は著者を含む3名の研究グループで(マルチメディア研究会、代表三上俊治)、財団法人マルチメディア振興センターの委託を受けて行われた。調査の詳細は、三上俊治、吉井博明、中村功(1999)『電子ネットワーク時代における情報通信マナーに関する調査研究』財団法人マルチメディア振興センターを参照。

文 献

- Aronson, S. D. (1971) The Sociology of the Telephone, *International Journal of Comparative Sociology*, XII, 154-158
- Dimmick, J., Patterson, S. and Sikland J. (1996) Personal Telephone Networks: A Typology and Two Empirical Studies, *Journal of Broadcasting & Electronic Media* 40, 45-59
- 藤竹暁(1980)『電話コミュニケーションの世界』ダイヤル社
- Gumpert, G. (1987) *Talking Tombstones and Other Tales of the Media Age*, Oxford Univ. Press, (石丸正訳『メディアの時代』新潮社, 1990年)
- McLuhan, M. (1964) *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill Book, (後藤和彦・高儀進訳『人間拡張の原理』竹内書店新社, 1967年)
- Meyerowitz, J. (1985) *No Sense of Place; The Impact of Electric Media on Social Behavior*, Oxford Univ. Press.
- NTT (1999) 「電気通信役務通信量等状況報告」
- 吉見俊也, 若林幹夫, 水越伸(1992)『メディアとしての電話』弘文堂
- 吉井博明(1993)「電話利用の新しい形態と電話ネットワークの社会的意味」川浦康至編 現代のエスプリ 306『メディア・コミュニケーション』至文堂
- 渡辺潤(1989)『メディアのミクロ社会学』筑摩書房

(本稿は平成9年度松山大学特別研究助成の成果の一部である)